

仁和寺蔵宝相華蒔絵宝珠箱の文様について

中 川 千 咲

仁和寺のこの宝相華蒔絵宝珠箱は平安前期の漆芸の優品として早くから知られ、国宝にも指定されているのは贅言を要しないであろう。ただ従来、特にこの箱を取り上げて研究したものは最近一つある位で、ほとんど無く、文様についてもその趣致や宝相華の形式化に和様化の濃いのを看取するといった程度のものであった。ここでも、文様について更めて詳細な研究を進めたとはいえないが、和様化という点について少し思いついたこともあるので述べてみようと思う。

まずこの箱の状態について、一応従来の解説に従って述べよう。^{註2}箱は方形入角の深い被蓋造りで、蓋と身の口縁に紐をめぐらし、濃く銀粉を蒔いて置口としている。素地は塼製といわれるが漆皮のようである。^{註3}文様は瑞鳥と宝相華唐草から構成され、蓋上面は一羽の瑞鳥を中心に、四羽の瑞鳥が二重にまわりながらこみ、その間を隙間なく宝相華唐草文で埋めている。身及び蓋側面は中心に一羽の瑞鳥を配し、隅の宝相華唐草文を間に二羽の瑞鳥と宝相華唐草文とが左右対照に配置してある。

蒔絵の技法は濃い平塵の地に、瑞鳥、宝相華唐草文を研ぎ出し、金銀

仁和寺蔵宝相華蒔絵宝珠箱の文様について

蒔絵をほどこし、文様の要所に金色を使用する。蓋の内側は淡い平塵地に、上面の内側は宝相文と鳥とを、また側面の内側は宝相華文、鳥、蝶を金銀蒔絵で描いている。身底裏には四個の銀製宝相華形鈕金具を打っているが、明治末年修理した際、三個を新補し、内外面とも修理がほどこされている。

この宝珠箱は寛平法皇(宇多天皇八六七―九三二)御所持という寺伝があり、如意宝珠を錦で包んで入れている箱で、それを守護する板絵の四天王像が付属している。

この素地、技法については当研究所保存科学部において、ソフテックスによるX線透視とX線蛍光分析を用いて調査した結果、新たな発見、従来より更に詳細なことを知り得た。これらの細かいことは保存科学部の報告書「保存科学」第三号の中里寿克、石川陸郎、立田三朗三氏による「平安時代漆芸技法資料」を見ていただくとして、ここでは意匠を見るに当って関連ありそうな部分についての概略のみを記しておく。

まず、素地はX線透視によって、身の底面以外の蓋、身の各面に一枚の麻布が貼ってあるのを検出し、これを所謂「布着せ」と見て素地が塼

製ではないことを呈示し、一方外見上の考察から蓋裏に漆皮特有の「くも手断文」の現われを認め、この箱を一応漆皮製と推定している。しかし、塵居を置き、四隅を入角とした特異な形体の漆皮による製作の困難さ、また形の上に生ずる漆皮独特の歪みのない点、塵居の稜線鋭く、入角もくづれていないことなどからして漆皮製と強く断定するのもひかえている。

蒔絵については従来、地を平塵あるいは濃い平塵地と見ていたのを沃懸地と認め、また蓋と身の口縁に紐をめぐらし濃く銀粉を蒔いて置口とするとあるのを、X線蛍光分析によって紐はなく下地で盛上げ、銀を濃く蒔いた上に錫粉が蒔いてあるのを検出している。蓋内面の平塵地は全体に燻み、金銀の区別がつきにくいし、あるいは錫粉でないかとも見、身内面は補修の部分多く、見込などは古い漆層は小さい断面が僅かに残るのみとしている。下地は粗い麻布が貼つてあるが、麻布のヤセ目が表面に少しも表われないのは不思議であり、布目に下地が残らずに剝離しているところから、下地は相当に漆分の多い固い下地であると想像されている。

蒔絵粉は金、青金、銀、錫の四種が使用されているが、銀と青金が一段細かく、地に蒔かれた金は少し粗く、粉はヤスリ粉よりもっと角のつれたものである。これのかなり細かい粉も作られ、いくつかの大小の粉を使いわけていることは蒔絵揺籃期には考えにくい事であり、ひいては、この箱の製作年代もあまり遡り得ないと推定している。

さて、文様について、些細に見るに、蓋表はまず中央は瑞鳥を八花形

で囲み、八花のそれぞれの先端に花文をつけているが、こうした構成の文様は正倉院の宝物や、唐鏡にしばしば見るものである。ただこの場合、花文は花に大きな葉四枚と小さな葉三枚を附しているが、四つのうち二つは更に花と二枚の葉を附した枝を拵げ、それぞれが対照的に配置されており、奈良時代に見られる多くが四つなら四つの花がいずれも同じであるのとはやや違っているといえる。共に整正された文様ではあるが、この箱では若干の違いながらも二種の花文で構成しているだけに、強さ、堅さといったものが少くなっているのが看取される。

次にこの文様のまわりを、先の花文と同じ類の花文四つで囲み、その間に鳳凰形の鳥四羽を配している。この花文は中心の花文と同じ類ではあるが、花の頭と左右に大きな葉を、その間に小さな葉を附しているのが違っているし、また頭と左右に葉をつけた花のある枝を左右に出し、折枝風に仕立ててある。この場合は四つの花文がいずれも同じである。この四つの花文の周囲を、やはり同じ花文で囲むが、表面の四角内にうまくはまるよう花文をより左右に拵げた形としている。四隅には中心と同じおしどり形の瑞鳥を配している。

こうした花文を旋回状に配置し、それを重ね、その間に鳥などを配する装飾法は正倉院宝物中の漆皮金銀絵鏡箱などにも求められるし、根津美術館の宝相華銀平文製装箱にはこの箱に近いものが見られる。この装箱は平安初期の平文の作例と見られているが(挿図1)方形隅丸の浅い箱で、蓋表の黒漆地に銀平文で宝相華を中心に蝶鳥などを旋回状に配置し、周縁に連環形の唐草を廻らしている。御物の漆皮箱蓋表の文様も同類であり、また仁和寺の宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱も迦陵頻伽ではある

が、宝相華が旋回式に配してあり、一応同じ傾向の装飾法といえよう。

次に側面の文様であるが、四面とも同じで、中心におしどり形の瑞鳥を置き、蓋表の折枝風の花文と同類の花文四つで囲んでいる。即ち上部の花文は頭と左右に大きな葉三枚、その間に小さな葉を配した花を中心、更に左右に三弁の花をもった蔓状の枝を出し、下に花をささえる茎がある。下部の花文も大体同じではあるが、花の頭に大きな葉が上部のものより一枚多く四枚つき、

その間に小さな葉が配してある。左右には同じ花枝を出しているが、これが下向きになっており、また花下の茎が上部のは元が左になっているのに、これは右になっている。

奈良時代の文様では、このような場合には、中心を軸として構成されるので、下部の花文は全体がさかさまに現わさ

れるのが普通であり、少くとも下部の花の枝の部分だけが下向きに表わされるようなことはない。またこの花文のような細かな変形、工夫は見られないであろう。かかる文様の構成、細かな神経の働き、工夫に奈良時代の左右相称的な文様というものを脱しつつある際の、その脱し方の一つの姿が窺われよう。

左右の花文は上部のものと同じであるが、枝は一本だけで、それぞれ

仁和寺藏宝相華時絵宝珠箱の文様について

が中心に向って出ているし、茎も元が中心に向いている。四隅には尾の長い鳥を配しているが、上部の二羽が、尾の先に大、小の葉を附したように描かれている。これは写し誤りとか、図取の下手なためになったというものではなく、何か意味があるのでないかと思うが、解らない。

身側面の文様は構成もそれぞれの花文も、蓋側面と同じである。ただ上部花文の枝の部分の花には三つの大きな葉がついているのが違っている。また蓋の表、側面ではおしどり形の

瑞鳥が中心に、尾長鳥が四隅に配してあるが、ここでは逆になっている。蓋表、側面、身側面の文様は一見して非常に似ているが、それぞれ細部に違いがあり、前述の如く一つの花文自体にも、また全体としても変化、工夫を働かせまわめ上げているのを見ると、その図案計画にはかなり苦心した跡が見える。

内面で文様のあるのは蓋内面であるが淡い平塵地で、上面の裏側に当る部分に

は三花卉の花に三つの大きな葉と二つの小さな葉を附した花文様を中央と四隅に置いて鳥を配し（挿図2）、側面内側には同じ花文を中央に、四隅に鳥と蝶をあしらっている。この場合、蝶と鳥を二つずつ対角的に配したものと、蝶一つに鳥三羽を配したものとあり、鳥の向きも自由である。文様の簡略なこともあるが、淡泊で、潇洒な趣も窺われる。

内面装飾の場合、蓋上面の裏側の装飾法と同じものが、正倉院の銀平

挿図1 宝相華銀平文架装箱 蓋表部分
東京 根津美術館

脱箱中蓋と称

するものに見られる。これは鳥はなく、

花の形式も違

うが、やはり

折枝風の花文

を中央と、四

隅に配してい

るところ全く

同じである

(挿図3)。ま

たこれには現

挿図2 宝珠箱蓋内面

在箱も蓋もないが、中子の文様として一応蓋を開けた時見られるものであり、宝珠箱では蓋を開きかえした際見られる文様であり、装飾法、意匠工夫に前代の風と通ずるものがある点などまた注目されるのである。

さて前述の如く文様の構成などについて細々と見て来たが、次にその主要素となっている花文について見てみよう。この花文は宝相華といわれているが、一般に宝相華と呼ばれる文様は実に多種多様で、殊に奈良時代はその花盛りであるというまでもないであろう。いま奈良時代のものの中からこの宝珠箱に近いものを求めると、正倉院の箆篋残欠に見出される。これは箆篋の肘木の元部に螺鈿で表わされているが、宝珠箱

四

と同様花の頭に

一つ、左右にそ

れぞれ大小の葉

を附した構成と

葉の形がほぼ同

じである。ただ

花の形と、箆篋

では葉形の中に

目形のものが三

つ表わされてい

るのが違ってい

る(挿図4)。

挿図3 銀平脱箱中蓋 (正倉院御物図録8)

大体飛鳥、奈良時代の宝相華と呼ばれる文様には花と葉形と、ザクロあるいはブドウのように実の集った形のもの三つを要素として構成されている一群がある。^{註4} それにも極く大ざっぱにいつて、例えば薬師寺東塔天井の格間支輪板間、唐招提寺金堂天井支輪板間あるいは法隆寺の弥勒菩薩光背(挿図5)などのように、比較的植物そのものに近い姿のもの、それが正倉院の銀薫炉のように唐草風に仕立てたものと、図案化されたものがある。図案化のものは多様であるが、螺鈿楓琵琶や螺鈿紫檀五絃琵琶の背面などに見るものは、花形を中心に葉形などを附しているところ箆篋の文様と似ている。五絃琵琶は花形の左右に大小の葉形を附し、頭に実を盛ったような形のものや載せた構成で、螺鈿で作り、花心、葉心には目のような形の琥珀が嵌め込んである(挿図6)。これを箆篋の文

様と較べるに、筵篋のは全体が自然の花枝に近く仕立てられていて形態は違うが、さりとて先の薬師寺のものなどの写生風の類とはまた異なり、むしろ花を中心に頭と左右に葉形を附着させた图案構成は五絃琵琶と同じといえる。花の形は別として、共に葉形には目のような形のものがある一方、五絃琵琶の花の頭の実を盛ったような形のものが、筵篋では左右の葉形とはぐ同じ葉形になっている。

そして宝珠箱では、筵篋の花文の形式を追いながらも、葉形はその葉心の先がややふくれ気味と思われところに目形のもの痕跡を残しているのかも知れないが、いずれもほぼ完全に自然の葉のように現わされているのである。

こうして見る

挿図4 筵 篋 残 欠 正 倉 院 (正倉院御物図録16)

と花形を中心
に葉形と熟実形
のようなものを
附させた形式の
宝相華文から、
折枝風とし、熟
実形のを葉
形に変形、簡略
化した花文が現
われ、その折に
は葉形は前者と
同じ形式を追っ

ていたのが、更に全体の構成などは同じながらもすべての葉形をいわゆる葉に変じたものが表われるようになったと考えられる。そこにこの宝珠箱の花文の類の成立・性格が見られるのではなからうか。

筵篋や宝珠箱の花文が折枝風になっているのは、正倉院の宝物中の螺鈿宮^{註5}の側面や、綴錦^{註6}の中に三枝に頭に葉をあしらった花を附した文様があり、関連があるとも思われるが、その間については知り得なかった(挿図7)。ただ宝珠箱の蓋内側の花文に通ずるものがあるのが注目される。また宝珠箱の花文の花そのものは筵篋の花の簡略化として関連が求められないでもないが、むしろ正倉院の版画宝相華文図、あるいは凡の彩絵などが似ており、こうした類の簡略化とも見られよう。

以上は宝珠箱の花文について、極めて大ざっぱながらその成立を推測してみたわけであるが、奈良時代の文様の承けつぎ方、変遷推移の様相の一端が窺われ、そこに和様化といわれるものの一つの姿が求められる

挿図5 弥勒菩薩光背 奈良 法隆寺

と思う。

正倉院 背面部分 螺鈿紫檀五弦琵琶 挿図6

次に従来から宝珠箱と製作期が同じ頃、あるいはやや先行するといわれる仁和寺の宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱と較べ、こ

の箱の文様の在方、意義などを更に見ておこう。

冊子箱は奈良時代に流行した漆製で（漆皮と考えられるふしもある）、長方形隅丸の深い被せ蓋造りである。蓋表中央に「納真言根本阿闍梨空海入唐求得法文冊子之宮」と金蒔絵で書き、これを中心に淡い平塵の地に宝相華、迦陵頻伽、蝶鳥などを旋回式に金、銀の研出蒔絵であらわしている。空海が唐から持ち帰った三十帖冊子を納めた箱で「延喜御記」によつて、延喜十九年（九一九）に作られたことが知られ、現存する蒔絵品中で年代の明らかな最古の作として既に有名なものである（挿図8）。

この箱の文様を見るに、蓋表は中央の文字のある枠の上下に花文、左右に迦陵頻伽と花文を配し、その周囲には鳥を飛ばせ、更に迦陵頻伽と

正倉院（正倉院御物図録7） 螺鈿宮 挿図7

花文をめぐるしている。こうした構図は前述の如く、正倉院の鏡箱、根津美術館の袈裟箱、更に宝珠箱にも通ずるものがある。上下の花文は傘形をした複雑な花形の左右に葉を附し、その先に唐草をつけた実のような形のものを伸し、花形の頭にはやはり唐草をつけた実のような形のものを、蝶をはさんで二つつけている。上、下とも全く同じで、その構成要素から見ると、前述の宝相華の一群といえようが、正倉院のものなどに見られぬ異形のものである。左右の花文は、花形は正倉院宝物の版画宝相華文と近い形をしている。が、頭に雲形と唐草を二つつ附け、左右に葉を配し、それぞれの先

に蓮葉形のもの、唐草を附した小さな花をつけている。この花は宝珠箱のものなどに近い形をしている。この文様も左右同じで、ただ文字のある枠に接して描かれた花文が左右少し違うだけである。更にこの一群の文様をかこみ、四隅を埋めるように花文が描いてある。これらは中央の花文と同じような傘形の複雑な花形、実のような形のもの、小さな花、唐草でつながれた葉から成り、その構成要素は中央の上、下の花文と同じであるが、構成法が違うし、四隅ともその構図が異なるのが注目される。この四隅が違ふといつても部分的に同じところもあり、それぞれ

計画的に構図をかえたというよりは、自由に描いていった結果とか、あるいはどれかが基本で他は写しくづれと解されるものである。この点宝珠箱では同じ花文に若干ずつ違いはあるが、計画的であり破綻が無く、整っているのが注目される。

また文様の間に鳥を飛ばしているが、正倉院宝物に同じ形式のものが見られる。蓋側面、身側面にも蓋表の花文と同じ構成要素になる文様があるが、蓋表の四隅の場合より更に形式にとらわれぬ、自由な描き振りを示している。

これらの主要文様である傘形をした複雑な花形をもった文様は、正倉院宝物や、唐鏡などに見当らない。しかし実を盛ったような形の部分がここではブドウの房状をなしているが、同じものが法隆寺の弥勒光背や、正倉院の銀薫炉の透彫に求められるし、構成要素からも宝相華の一群のものの性格をはっきり示しており、また全体の趣からしても、前代

あるいは唐の風がかなり濃く感ぜられる。

各面に描かれた迦陵頻伽は正倉院の漆金薄絵盤^{註7}や、筥^{註8}に見られる迦陵頻伽とは趣が違い、むしろ中尊寺の金銅華鬘などに近い姿、趣のように思われる。

かく見てくると、冊子箱において構図や鳥の形式は奈良時代のものに通じ、花文は形式性格の点でも前代あるいは唐代の風を伝える。しかし表出に形式にとらわれず、自由さが見られ、それが一面において、やや整正を欠き、煩瑣な感をもたらししている。宝珠箱は構図に前代の形式を追っているが、花文は前代のものが変形され、既に一つの様式が形作られているように思われるし、文様の表出が計画的で、細かく神経が行き届いてはたんがない。こういった点に意匠の差異が認められる。

両品とも精巧な作行であり、かつしかるべき用に供せられたものであろうし、こうした差異はやはり宝珠箱が冊子箱より遅れるのを示しているように思われる。

技術的に見ても冊子箱は平塵地であるが、宝珠箱は平安前期の作には珍らしい濃密なものであるし、また金、青金、銀、錫の大小の粉を使い分け、しかもかなり細かい粉まで使用している^{註9}のを見るとやはり冊子箱の後に置いて見たい。

挿図 8 a 宝相華迦陵頻伽蔀絵冊子箱蓋表
京都 仁和寺

挿図 8 b 同上 身側面

ではこの二者の隔りはどのくらいかを求めるのは、この頃の漆芸品で年代の明確なものは他にないし、文様の同じようなものもほとんど無く、なかなか困難である。一応花文の上から見ると、春日御料古神宝類中の黒漆彩文麻笥にほぼ同じ花文の彩絵が見られる。

これは社家の千鳥家の文書によって一条天皇（九八七—一〇二一）の寄進されたものと見られ、一条天皇は永祚元年（九八九）に行幸されているのでその折の寄進とも推察されるものである。

千鳥家文書は平安から鎌倉時代にかけて書かれたと推定されているが、内容などについてはなお詳細に調査を要する^{註10}と思う。ともかくこの笥は作行、趣致からしてもまず一条天皇の頃、即ち十世紀末頃の作であるとして差支はないと思われる。

この花文は宝珠箱と同じながらも、宝珠箱の文様の整正さを脱し、微妙な柔かさで表わされており、その趣といい、奈良時代以来流れて来た和様化の道程の行きついたところを端的に示すものとされるが、たしか^{註11}に宝珠箱の花文との間にはかなり時間的な隔りが窺われる（挿図9）。むしろ花文の形式は笥の場合のように同じではないが、東京国立博物館蔵

の金銅如意の宝相華文が目を引く。これは雲脚基部の前後面に「施入」「天曆十一年還入養勝院長財」の針書が見られ、紀年銘のある如意の最もたるものである。その雲形の板全面に宝相華文が巧みな蹴彫で表わされているが、曲線の構成、調子、また全体の趣きに金工品ながらも、宝珠箱の花文に相通ずるものがあるように思われる（挿図10）。

また宝珠箱に見る葉の表出、枝などの曲線の扱いに冊子箱と通ずるところがあるようであり、宝珠箱が趣致においてもそれほど隔りがあるとは見えず、先の如意が天曆十一年（九五七）以前の作なることなど総合して考えると、冊子箱が作られたという九一九年以降、まず十世紀の中葉頃にかけて製作されたのではないかと推測したい。

なお、本誌に柳澤孝氏がこの箱に附属している板絵の四天王像について論じられおり、それが同じく十世紀中葉を下らない作と推定されていることを附け加えておく。

従来工芸史上において和様化ということはしばしばいわれてはいるが、殊に平安前期に関しては遺品が少なく適確に握みにくいことなどもあって、その具体的な姿については余り求められなかったようである。ここでは主に宝珠箱の文様の形成、在り方などについて、いろいろ推測を試みたが、宝珠箱の製作期についての明確なことはつかみ得ないとしても一応平安前期における奈良時代の文様の継承の在り方、いうならば和様化というものの一つの様相を抽出して見た積りである。

挿図9 黒漆彩文麻笥 奈良 春日神社

が多かったが、ここに厚くお礼申し上げます。

東京国立博物館 金銅宝相華文如意 挿図10

これについては研究すべき問題は多いと思うし、またかかる問題を扱うには美術全般に亘って広く資料を網羅し、考察してかからねばならぬのであるが、ここでは極く小範囲に止め、雑駁なものになってしまった。機会を得て更に研究して見たいと思うが、大方のご示教を願う次第である。

本稿については鈴木友也、井上正両氏のご示教にあずかること

し、茎にも二枚の葉をあしらった折枝風の花文が織出されている。

7 木製の香炉の台であろうが一見蓮華座風である。蓮弁には宝相華、花喰鳥、鴛鴦などが華麗な色彩で表わされており、そのうち二枚の蓮弁に迦陵頻伽が描いてある。

8 笙の元の部分に平文で迦陵頻伽が表わしある。

9 註1の論文

10 鈴木友也、井上正両氏のご示教にあづかった。

11 井上正「平安時代装飾文様の展開について」(仏教芸術 六七)

註

1 中里寿克、石川陸郎、立田三朗「平安時代漆芸技法資料」I(保存科学三号 昭和四二年三月)には光学的方法によって、この宝珠箱の研究がなされている。

2 主に「国宝」二(毎日新聞社 昭和三九年十二月刊)によった。

3 岡田譲 溝口三郎「漆芸」—日本美術大系七—(講談社 昭和三六年三月刊)

4 宝相華についてはいろいろ論ぜられてもいるが、渡辺素舟氏はその著「東洋図案文化史」(富山房 昭和二六年三月刊)の中で、宝相華はサ、ンペルシャにおいて一つの形式単位が完成し、蔓で実があり、葉形飾りであることが必要な要素でないとされている。

5 玉帯を入れる円形合子形の筥である。黒漆地に、蓋表には唐花文、側面に花卉、雲、飛鳥を螺鈿で表わし、花心にはそれぞれ水精玉が嵌め込んである。

6 色彩華麗な綴錦で、四弁の花の頭と左右に葉、その間に葉のような形のものを附

仁和寺蔵宝相華蒔絵宝珠箱の文様について